

渡辺拓也 著
『飯場へ——暮らしと仕事を記録する』

(洛北出版, 2017年, 四六判並製506頁, 2600円＋税)

野村 駿

本書は、下層労働市場の一端を構成する飯場を対象とした重厚なエスノグラフィーである。筆者は、4か所の飯場への参与観察を実施することで、飯場労働者の労働・生活世界を緻密に描き出すだけでなく、負の意味付与を伴うカテゴリー化実践を微視的な排除メカニズムとして考察している。長期におよぶ実直で丹念な参与観察によって得られた本書の知見は、飯場労働を実際に体験していない者にとっても追体験可能なかたちでまとめられており、寄せ場研究など類似の下層労働研究にとって重要な貢献を果たしているといえる。

本書は8つの章と3つのコラムから構成されている。それらは大きく2つに分けることができる。第1章から第4章はどちらかというと飯場の労働・生活世界の実態を記述的に描き出すのに対し、第5章から第8章は、飯場労働者の人間関係を「排除」という鍵概念をもとに分析的に検討している。以下に各章の概要を記す。

第1章では、筆者がはじめて行った飯場での14日間のフィールドワークの記録が、日記形式で書かれている。「私エスノグラフィー」としての本章の記述は、第2章以降で展開される飯場の労働・生活世界に関する議論を理解するための背景知識を提供するものである。また筆者も述べるように、参与観察の中での感情の機微がありのままに描かれることで、読み手が筆者の戸惑いや違和感などを理解しながら読み進められる工夫が施されている。

続く第2章では、飯場の労働・生活世界がより詳細に記述される。章の前半部分では飯場労働の基礎情報として、〈現金〉と〈契約〉の違い、飯場に入る経路、飯場の労働条件、飯場の居住環境などがイラストや写真つきで紹介されている。なぜ前借りが必須なのか(192-193頁)、手帳の獲得に対する意味付け(203-204頁)などは飯場における生活のリアルな実態を示す事例として興味深い。

第3章では、寄せ場を介した飯場労働の実態が、第4章では、求人広告を介した飯場労働の実態がそれぞれ描かれている。第3章では、A建設・B建設・C建設という3つの飯場での労働経験をもとに、「飯場労働者の心得」として、「手元は言われたことをやっていたらいい」「働きすぎてはいけない」「怠けているように見られて

はならない」の3つが指摘される。そして、これらの「心得」を体得することによって初心者是一人前の手元になっていくという。働きすぎても、また怠けているように見られても駄目で、労働者が「勤勉さをほどほどにアピールしながら怠けている」(250頁)という指摘は、後段の分析につながる重要な指摘である。またC建設に関して、余剰労働力を抱えこまざるを得ないという特徴が飯場の巨大化を生起させていると述べられている。

第4章では、X建設の労働実態が描き出される。求人広告を介して労働者を集めるX建設では、職人やオペレーターといった技能労働者や資格保有者が重宝され、経験年数の長い労働者が定着する一方で、若年労働者は定着しないという実態があった。こうした労働者の選別・淘汰過程の中で、X建設は循環的に現場労働を成り立たせていく。そしてそれは、余剰労働力の内包と飯場の巨大化をもたらすと指摘される。また、中国人技能実習生を用いているという特徴もある。これらの特徴が持つ意味については、第8章で詳細に検討されることとなる。

第5章以降は、前章までの記述をもとにした詳細な分析が施されていく。第5章では、「飯場の労働文化」という視点から、飯場労働者の序列関係と行動様式が検討される。序列関係に関しては、飯場労働者が、契約期間の長短と定着の意志から4つに類型化され、それぞれの特徴および類型間の相互行為について分析している。行動様式に関しては、「初心者へのフォロー」「有能さへの志向」の2つが導出され、それらが「一人前の労働者」をつくり、再帰的に行動様式が維持・再生産されると結論付けている。

続く第6章では、飯場労働の実態を「勤勉」と「怠け」の概念から再考している。まず、「有能さへの志向」という行動様式と労働それ自体の楽しみが飯場労働者の働くモチベーションになっていると指摘される。続けて、「怠け者」というレッテルを用いたカテゴリー化実践を分析することで、「怠け者」が、客観的根拠のないままに集団的に生み出されるとする。現場仕事の責任を担う固定層から流動層に向けて「われわれ」とは違う「やつら」としての「怠け者」のレッテルが付与され、労働者間という微視的レベルで排除が起こっていることを指摘する。「勤勉」という評価も「怠け者」というレッテルも、労働者間の集合的力学において不断に生成される「虚構」であると筆者は論じ、「『勤勉』と『怠け』を相対化しつつ、生活の中に位置づけるものとして労働をとらえ、権力関係をかわしていけるような視点を見いだしていくことが必要なのではないだろうか」とまとめている(370頁)。

第7章では、使用者—労働者という権力関係のもとで生起する「怠け者」のカテゴリー化実践が検討されている。はじめに、使用者—労働者の相互行為の中で「普通」の境界線が繰り返しひきなおされ、「普通」ではないものとして飯場労働者が位置付けられることを指摘し、それが排除実践の1つだと述べられる。続けて、「怠け者」の創出による排除の構造は、使用者側が作業内容を明確化しないことや、労働者の

能力と作業内容とを調整しないことで生起していると論じ、構造的問題であるにもかかわらず、問題の所在が個人化されてしまう実態を批判している。

第8章では、求人広告を用いたX建設での労働実態が検討される。作業内容が明確に伝えられない中で、怒鳴られることによって新人教育が行われる理不尽さ、その理不尽さを内面化してしまう中国人技能実習生、理不尽な構造的問題を個人の力で乗り切るよう求められ、できなければ「怠け者」のカテゴリーによって排除される実態などが詳細に描かれている。

終章となるおわりにでは、本書の知見の総括が行われる。「労働者のコミュニティ」という視点から、共同性によって労働現場での学習が担保されるにもかかわらず、その共同性が切り崩されていく実態に警鐘を鳴らし、「不当性の感覚」を磨いていく必要性が述べられている。

このように、本書は、飯場労働というこれまで看過されてきた領域の内部構造を徹底して労働者の視点から描き出すことで、今後の研究に様々な示唆を与えるものとなっている。特に重要な功績と思える点は次の2点である。第1に、下層労働者を取り巻く現代社会の巨視的な排除メカニズムではなく、労働者間および使用者—労働者間という微視的なレベルにおける排除メカニズムを検討した点である。筆者は3つ目のコラムにおいて、本書における排除概念の検討を行っている。そこでは、本書における排除が、あくまでも負の価値付与を伴ったカテゴリー間作用の問題であると論じている。つまり、排除する／されるカテゴリーを用いた「われわれ」と「やつら」の間にひかれる線引き実践の問題として排除を捉えようという視点である。この視点に立脚することで、第6章以降で検討される「怠け者」をめぐる排除のメカニズムなど、飯場労働内部の相互行為に潜む排除の実態を見事に描き出しているといえる。

第2に、筆者自身の感情の揺れ動きを積極的に分析の俎上にのせる「エピソード記述」の方法論である。筆者は、この方法論について「エピソード記述とは、つまるところ、状況についての解釈である。調査者自身の感情について突きつめて考える中で、その状況に関わる他者の発言や行動、具体的な出来事についての解釈が深められる」と述べる（338頁）。この論述通り、筆者は自身の感じた違和感や疑問をもとに考察を深め、「不当性の感覚」から飯場労働における微視的な排除のメカニズムを検討するに至るのである。

いずれもこれまでの研究を大きく前進させる点で、本書の功績として指摘できるだろう。ただし、上記2点に関連して疑問点がないわけではない。

第1の点に関して、筆者は排除概念をカテゴリーの問題とするが、その使用にいささか不明瞭な箇所があった。例えば、使用者—労働者間の排除問題を「怠け者」カテゴリーに着目して検討する第7章の前半部分（384-385頁）。「河合建設の場合も、

飯場労働者を排除しているわけではない。もちろん、飯場や飯場労働者について知らないために、自分たちとは異なる事情を持つ者への配慮は欠いているが、一緒に働いている時点で労働力としては包摂していると言える」とある。ここでの排除／包摂の意味は、はたして負の意味付与を伴ったカテゴリー間作用の問題を指しているのだろうか。評者には、むしろ筆者が3つ目のコラムで検討した、従来型の使用方法——「一般的な社会的排除論は何らかの社会的不利益をもたらす原因を『参加の欠如』の問題ととらえ、プロセスとして実態を把握しようとする」（324頁）——に従っているのではないかと、つまり、設定した意味内容からずれているように感じられた。排除／包摂概念は広く知られる概念であるため、時折、上記にあげた箇所などでは、読者の混乱を招きやすいように思われる。例えば、使用するカテゴリーを徹底して明記するなど、読み手の解釈を導くような工夫がほしかった（もちろん、すべての記述が不十分というわけではない）。

第2の点に関して、分析の出発点となる筆者の感情が、そのほかの飯場労働者とどれほど共有されているのか、つまり「類的同型性」を根拠とした推論の仕方に疑問がある。特に第8章の分析では、筆者の「不当性の感覚」が分析において重要な位置を占めている。怒鳴られながらの新人教育、指示の仕方の感じ悪さ、現場の指示が錯綜するダブルスタンダードな状況に対する違和感など、筆者の感情の機微が事細かに記述されている。しかし、その感情がほかの労働者にも共有されているのかどうか、そのことを裏付ける語りは見当たらない。筆者の感情を通して描き出された現場の実態と、飯場労働者の視点から見えている現場の実態は本当に同じだと見なしてよいのか。もし、筆者以外のほかの労働者が理不尽さや「不当性の感覚」を感じることなく労働に携わっているとすれば、そのこと自体を分析の俎上にあげる必要があったのではないかと（例えば、「不当性の感覚」を抱かせないままに理不尽な労働現場へと包摂するメカニズムの実態など）。さらに検討を深める余地があるように思う。筆者自身の感情の揺れ動きを詳細に記述するのと同様に、ほかの飯場労働者の感情の揺れ動きも詳細に記述する必要があったのではないかと考える。

しかし、いずれにしても本書は、研究視点という点でも方法論という点でも今後の研究に引き継がれていくべき要素を多分に含んでいるといえる。今後、広く参照されるべき一冊である。

名古屋大学 教育発達科学研究科 後期博士課程 教育科学専攻
のむら はやお
nomura.hayao@d.mbox.nagoya-u.ac.jp